

下水道映画を 探検する

忠田友幸

下水道

にスポットを当てると、
映画はさらに**面白い!**

『月刊下水道』で人気を博した
日本で唯一の
下水道専門誌
前代未聞の映画ガイド、まさかの新書化!

下水道映画を探検する

忠田友幸

星海社

80



SEIKAISHA
SHINSHO

古来、地下をぬって走る回廊の類は、人々の想像を掻き立て、様々な創作へと結びついてきた。地底トンネルの旅だとか、歴史的建造物の地下に隠された通路や空間があるとか、地下を巡る冒険には、子供から大人までが胸を躍らせる。

だが、楽しさばかりがあるわけではない。地下には、「闇」のイメージが付随する。闇は魑魅魍魎ちみもうりょうを呼び寄せる。地下を舞台とした物語には、恐怖譚たんも多い。そこには、恐怖の叫びも満ちているのだ。

現代の地下を代表するものといえば、地下室に地下道、地下鉄……そしてそう、下水道である。地下鉄や地下道、共同溝などは、都市の地下のごく一部を走っているに過ぎない。しかし、下水管は網の目のごとく都市の地下を覆いつくしている。明るく照らし出された都会において、下水管は唯一残された巨大な地下空間である。そして、その入り口であるマンホールがそこかしこでわれわれを地下へと誘いざなっている。

こうした地下世界Ⅱ下水道は、古くは文章で表され、映画というメディアが広まってからは、数多くのシーンに名脇役として登場してきた。

そこでは、下水道は本来の役目を離れ、さまざまな使い方をされる。銀行強盗に利用され、隠れ家として一時の居場所を与え、モンスターが潜む。逃亡者が走り去り、正義の味方が駆け抜け、車さえも疾走する。

本書は、下水道が登場する映画、そして登場した下水道について、テーマごとに紹介していく形をとる。

本文でも触れているが、この分類はあくまで便宜的なものだ。目次をご覧くださいと、テーマごとで作品数に大きな差があることにお気づきになるだろう。「逃走路」として使われる作品は一六を数えるのに、「隠れ家」としては四しかない。その差は、監督や脚本家が、こんな場面で下水道を使ったら面白いだろうと考える可能性の差とも言える。脚本家たちは観客の喜びそうなことを考えるのだから、この差は、観客つまり皆さんの意識とも結びついているわけだ。

こんなところにも、観客すなわち市民や社会が、下水道をどのように見て、どう捉えて

いるかの一端が見えてくる。

下水道が登場する映画を観ることによって、人々の持つ下水道のイメージや文化的な意味をも考えること。それが本書の最終的な目標でもある。

さあ、まもなく、上映です。

上映前に

下水道の基礎知識

本書では、映画に登場する下水道をつぶさに見ていく。そのため、端々に専門用語や技術的な用語が出てくる。ここでは、より詳しい理解のため、用語をまとめて解説していく。この基礎知識をもって各映画紹介を読んでもいただければ、より楽しんでいただけるものと思う。

・合流式と分流式

下水道には、汚水（トイレや風呂、台所などから出る汚れた水）を流す方式に、「合流式」と「分流式」がある。合流式は、雨水と汚水を一本の管で流す方式、分流式は雨水・汚水を別々の管で、すなわち二本の管で流す方式である。

家庭からの排水も、合流式では雨どいの水も汚水と一緒に流すが、分流式では雨水はU字溝や雨水管に、汚水は汚水管へ流す。

映画のなかで、都会のネズミなどがU字溝から管を通して、台所の排水口に出てくる場面があるが、都会ならほとんど下水道が整備されているはずなので、ありえない。NGということになる。

・マンホールと接続室

マンホールは、管と管の接合部、つまり交差点などには必ずあるものだ。小さな円筒形のマンホール以外に大きな部屋が作られている場合があり、大口径の幹線と幹線がつながる部屋で接続室と呼ぶ。アメリカの作品では、用途のよくわからない大きな部屋が度々登場するが、すべて接続室と書いている。

・ヒューム管、カラー、卵形管、矩形きよ(ボックス管)

下水管の種類はいろいろあって、一番良く出てくるのは円形の管だ。日本ではヒューム管という受け口の付いた管が一般的だが、内側からはわからないので、これも円形管と書いている。ちなみに、ヒュームさんという人が最初に作ったため、この名がついた。

受け口のない管をつなぐカバーのような管をカラーと言う。これは、一度だけ『シヨール
シャンクの空に』で登場している。

卵形管は、文字通り卵を立てた形の管だ。日本ではほとんど残っておらず、東京の神田
下水が有名だが、欧州の作品にはよく登場する。少ない水で流速を得るためにこの形にな
っている。

四角い管は、矩形きよ、またはボックス(管)と記した。

「管きよ(渠)」という言葉もよく登場する。「渠」というのは、溝の意である。また、「暗
きよ」と言えば、埋設したり、ふたをかけて地上から見えなくした溝、つまり管きよと同
じものになる。対して「開きよ」と言えば、ふたのかかかっていない溝で、コンクリート張
りの小河川と同じような形となる。

• 排水設備

家庭から下水本管まで排水するための管や柵を、排水設備と呼ぶ。排水設備と書いてあ
る場合、道路上ではなく、民有地内の設備ということになる。

・小段、インバート、ハンチ

小段というのは、堤防に設置されている狭い通路のことだが、本書では、下水管内の点検用通路を意味して使用している場合がある。

また、インバートは、管やマンホールの底部にコンクリートなどで丸みを持たせたり、円形の水路を成形したものをいう。本書では使用していないが、現場では「インバルを切る（インバートを成形してある）」といった言い回しを用いる。

そして、ハンチとは、ボックス管の角を斜めの構造にしたもののことである。

・グレーチング、スクリーン

グレーチングは、側溝や柵などに掛けてあるスリット状のふたをいう。下水管にゴミが入るのを防止するために設置される。

スクリーンは、グレーチングを大きくしたような形をしている。役目もグレーチングに似ており、大きなゴミを引っ掛けて取り除く機能を持っている。これは、『ミニミニ大作戦』の旧作に登場している。

・電らん管

日本では下水管の中に別の管を入れることはないが、欧米の作品では、管の肩の辺りに配管が走っている映像が頻繁に登場する。それらはガス管や電らん管などだが、外から見ただけではガス管とはわからないので、すべて電らん管と書いた。

電らん管は、ケーブルを収めてある管である。電らんは、「電纜」と書き、要するにケーブルのことである。分かりやすく電線管と書けばいいじゃないかと言われそうだが、電線管は電力用の電線を入れる管のことで、そのため、すべて電らん管とした。

目次

はじめに 3

上映前に 下水道の基礎知識 6

SCENE

1 ネズミ編

18

雨水排水口から下水道へ侵入 『ベン』 20

ネズミが運ぶ伝染病 『ファンクス』 24

下水道の歴史と伝染病 『ザ・ペスト』 28

体長7・5cmのネズミから見る下水管 『スチュアート・リトル』 32

美しき下水管をネズミがひた走る 『パリ・ディストラクション』 36

どこにでもつながる下水管 『ラッツ』 40

パリはU字溝も石造り 『レミーのおいしいレストラン』 44

下水道への認識不足が残念 『川の光』 48

SCENE

2 災害編

52

災害と下水管の関係 『ボルケーノ』 54

道路陥没と下水管の関係 『ホスタイル・グラウンド』 58

下水管で爆発 ふたが吹っ飛ぶ 『コンバッション』 62

下水道で火災発生 『シテイ・オン・ファイア』 66

SCENE

3 モンスター編

70

下水道施設満載の一本『アリゲーター』 72

アメリカでも下水管の認知度は低いのだ『アリゲーター2』 76

点検用通路の続く下水本管『スピーシーズ種の起源』 80

下水道には何でもいる「宿主」(『X-ファイル』シーズン2 第2話)

下水処理場? 登場『ミミック』 88

円形管をバイクで走り抜ける『プロブ 宇宙からの不明物体』 92

にせもの下水管の見分け方『ジェラティノス』 96

邦画にも昔から映っていた下水道『美女と液体人間』 100

ジープで乗入れ、でかい雨水管『放射能X』 104

世界遺産? 古都の古い下水道『グリッド』 108

韓国の近代的な雨水管が舞台『グエムル 漢江の怪物』 112

下水道も迷路のひとつ『ゴースト・ハンターズ』 116

逃走路

編

120

- 誇るべき光と影の下水管 『ゴールデンランバー』 122
- 生き延びるための逃走路、下水道 『シンドラーのリスト』 130
- うそか、まことか、下水管の滑り台 『ジャック・ナイト』 134
- 雨水の流れない接続室？ 『S. W. A. T.』 138
- ハッチのついた下水管 『セイント』 142
- ちょっと変わった石積みアーチ管きよ 『小さな目撃者』 146
- 四作品に描かれた、それぞれの下水道 『レ・ミゼラブル』 150
- 下水道映画の最高峰 『第三の男』 158
- 下水道で逃げのびろ 『地下水道』 166
- 下水管で動物園に侵入だ 『わんわん忠臣蔵』 170
- 排水管からダイビング 『逃亡者』 174
- ミニ化して下水管へ突入 『ブラボー火星人 2000』 178
- 認識不足、邦画の下水道 『ぼくらの七日間戦争』 182

5

強奪

編

198

円形管をクルマが疾走『ミニミニ大作戦』（一九六九年版）186
 新作でも管きよ疾走『ミニミニ大作戦』（二〇〇三年版）190
 極めつけ、フランスパンを通すマンホールふた『女囚さそり けもの部屋』

194

合流式下水道がもたらした危機『大強奪』200

犯行現場の下水道で撮影『掘った奪った逃げた』204

銀行入口は、マンホール『史上空前の大金庫破り！』208

ラストシーンは下水道『BANKER BREAK バンカー・ブレイク』212

下水管のようで下水管でない『黄金の七人』216

強奪は穴掘りばかりじゃない『サボタージュ』220

6

隠れ家

編

224

- 本物ではないけれど、美しい下水管 『デリカテッセン』
 ピザの配達先は、下水道 『ミュータント・タートルズ』 230 226
 命を救った下水道 『ソハの地下下水道』 234
 ティム・バートンの下水管 『バットマンリターンズ』 238

7

脱獄

編

242

- 希望へつながる下水管 『ショーシャンクの空に』 244
 見てみたいアルカトラズ刑務所の下水管 『ザ・ロック』 248
 下水管をぶち抜け 『穴』 252
 初めて見た巨大デイスポーター 『新・黄金の七人7×7』 256
 オープニングは下水管 『ミッション…インポッシブル／ゴースト・プロトコル』 260

実話ではなかった下水管からの脱獄『ミッドナイト・エクスプレス』
264

SCENE

8

歴史編

268

城の中の排泄物処理法は『スノーホワイト』
270

実物の下水管には味がある『ヤング・ブラッド』
274

下水道映画の嚆矢『第七天国』
278

おわりに
282

SCENE

1

ネズミ編

雨水排水口から下水道へ侵入

『ペン』

まずは、「ネズミ」にまつわるいくつかの作品を紹介していこう。苦手な方も、どうかご辛抱いただきたい。下水管の登場する映画を数多く観ていると、「やっぱり下水管にはネズミかな」などと感じられて、冒頭を飾るにふさわしいテーマだと思えたのだ。ネズミをチラッと見せるのが、どうやらそれらしいのである。

日本では、下水管内に管理用の通路がない場合が多いので、あまりピンとこないが、欧米では多くの場合、管内に小段のような通路がある。そこにネズミが時折映るのだ。

だが、ネズミが主役級という映画はなかなかない。私が幼いころには、テレビで『マイティマウス』『トムとジェリー』『トップ・ジョー』といった子供向けのアニメーションや人形劇をやっていた。しかし、それらはネズミが主役ではあるが、擬人化されて戯画的に描かれたものだ。本物のネズミが活躍する作品には、そうそうお目にかかれない。

1972年アメリカ／95分

監督：フィル・カールソン

出演：リー・モンゴメリー ジョセフ・キャンパネラ

ところが、擬人化したネズミではなく、本物のネズミが主役級という変わった映画もたまには見つかる。それが、『ウイラード』（一九七〇）である。孤独な青年ウイラードはネズミの「ソクラテス」と「ベン」を可愛がっていたが、会社に連れていったソクラテスが上司に見つかり、殺されてしまう。ウイラードは怒り狂い、ベンと仲間のネズミを使って復讐ふくしゅうを始めるものの、最終的にネズミたちをも殺そうとしたウイラードを、逆にベンたちが殺してしまいう形で幕を閉じる。

で、早速で申し訳ないのだが、『ウイラード』に下水管は出てこない。翌年、そのベンが主役として登場する続編が公開されるのだが、それこそが本当に紹介したい作品なのだ。その名もずばり『ベン』という。『ベン』の冒頭は、『ウイラード』のラスト、すなわちウイラードが殺されたところから始まる。こういう、まったくの続きとなっている映画も珍しいのではないか。

STORY

警察は、ウイラードやその上司の殺害はネズミの仕業と判断し、ネズミ駆除作戦を開始する。しかしベンはネズミの大群を指揮して、スパーマーケットなどを次々に襲う。

一方で、ベンは心臓病を患う少年ダニエルと友達になる。ダニエルは警察の駆除から

ベンを逃がそうとするが、ついに下水道の隠れ家は見つかり、火炎放射器でネズミたちは焼き払われていく。

泣き悲しむダニエルの前に、傷ついたベンの姿が……。



お目当ての下水管は、ダニエルがベンの隠れ家を見に行くあたりから登場する。ダニエルはベンに案内され、車道脇の雨水排水口に腹ばいになって入っていく。「子供が入れる大きさなの!？」と驚いた。ダニエルはさらに、下水本管への取付管（直径は五〇センチほどあるのだろう）を進んでいく。そのシーンが左ページの写真だ。

この映画を観て以来、アメリカに行く機会があるたびに、雨水桝や道路の排水口をチェックしているが、こんなに大きなものはまだ見つけていない。

さて、取付管に入ったダニエルは本管へと降りていくが、取付管の設置高さでダニエルの身長を考えると実際には降りられないはずなので、そのシーンはさすがに映されない。

本管内部の状況は暗くて判然としないが、大きなボックス形の中央に汚水の溝が流れている。両脇にはゴミや汚物がたまっており、かなり汚く描かれている。上部に取り付けられた管から汚水が突然流れ出てきて人がかぶるシーンもあり、「汚い下水管」というイメー

ジが演出として強められているようだ。

欧米作品での下水管にはよく見られる電らん管らしき配管も、ダニエルの肩のあたりに走っている。そのほか、ネズミの駆除シーンでも下水管は長く映されるが、下水管としてはそれほど特筆すべきところはない。

この映画は、おびただし数のネズミや「ネズミが人を殺す」というアイディアが観者の恐怖を煽り立てる。しかし、むしろ、互いに助け合うベンとダニエルの愛情にこそ主眼がおかれている感がある。幼き日のマイケル・ジャクソンが、透明感のある物悲しい歌声で歌うテーマ曲「ベンのテーマ」もまた、その印象を強くするのに一役買っている。

今ではレンタルビデオ店にもなく、あまり観る機会のない作品だが、『ウイラード』のほうは二〇〇三年にリメイクされている。個人的には、下水管のたつぷり登場する『ベン』をリメイクしてほしかったのだが。



ネズミが運ぶ伝染病

『フアングス』

私自身、マンションで暮らすようになり、とんとネズミを見なくなってしまった。昔は、屋根裏で運動会をしていたものだが。私たちの周りに出没するネズミは基本的に「イエネズミ」と呼ばれるもので、「クマネズミ」「ドブネズミ」「ハツカネズミ」の三種類がいる。下水管にいるネズミはその名の通りドブネズミで、家に住みつく種類も一九七〇年代前半まではドブネズミが八割を占めていた。ところが、八〇年代に五割、九〇年代になると二割まで減ったという（名古屋市生活衛生センターの調査による）。逆に勢力を拡大してきたのがクマネズミだ。クマネズミはドブネズミよりもひとまわり小さく、一・五センチの隙間があれば侵入してしまううえ、警戒心が強くて駆除が難しい。

ところが近年、さらしにしぶとい「スーパーラット」なるものが現れている。こいつは毒餌にも適応したクマネズミで、殺鼠剤が効かず、高い学習能力によって罠にもかからない。

2001年ドイツ／98分

監督：イエルグ・ルードルフ

出演：ラルフ・ヘルフォーツ アン・キャスリン・ブーツ

罨にかかると確率は、ハツカネズミが五〇パーセントのところ、スーパーラットはわずか二パーセントだというのである。

人間とネズミは、中世の黒死病流行の頃から、いやもつと昔から闘い続けてきたが、まだまだ終わりそうもない。そんな人間とネズミとの闘いを描いた映画が、『フアングス』だ。

STORY

異常気象が続いたドイツ・フランクフルトでは、ネズミが大量発生し、死に至る正体不明の伝染病が広まり始めていた。防災特別チームの一員ダブロックは、下水道にもぐり、火炎放射器でネズミの駆除を開始する。しかし何万匹というネズミが現れ、都市は混乱に陥る。

一方、伝染病の原因を調べていた医者のカトリンは、ネズミが伝染源だと解明し、抗体を持つ人間を探し始めるが、自分の娘も感染していることを知る。

伝染病の拡大を恐れ、軍は都市を封鎖。壊滅が刻々と近づくなか、閉鎖された市場がネズミの巣であることを突きとめたダブロックは、ガス爆破で方をつけようと単身乗り込む。

はたして、爆破は成功するのか。また、抗体は見つかるのか。

舞台はフランクフルトだが、本当にフランクフルトの下水管なのか目を凝らして見ていたら、マンホールふたが大写しになる場面で「FRANKFURT」の文字が読めた。

下水管は、大きなボックス状の構造で、中央に汚水溝が作られている。『ペン』と同じような感じだが、こちらには汚物はあまりなく、きれい過ぎるぐらいだ。水に映った灯火のゆらめきも美しい。伝染病が蔓延するのだから、もう少し汚く描いたほうが実感がわくのではないだろうか。壁面には各種の配管が走り、非常灯のような電灯がついている。下水管内に電灯がついているのは、ヨーロッパの作品によく見ることができるといえる。

この作品では、伝染病を媒介するネズミが群れとなって襲いかかってくるが、生物が群れとなって襲いかかってくる光景はネズミに限らず恐ろしいものである。たとえばヒッチコックの『鳥』(一九六三)では、鳥が何を考え、なぜ襲ってくるのかがわからず、大変な恐怖を覚える。その点『ウイラード』や『ベン』のネズミはかなり擬人的で頭が良すぎるため、そうした恐ろしさが無い。『ファンクス』は、単にネズミの数が恐ろしい。

『ウイラード』『ベン』と『ファンクス』とで決定的に違うのが、ネズミの数である。

『ウイラード』には、五〇〇匹のネズミが使われている。すごい数だが、どうやって集めたのだろうか。実は、動物調教師が一年計画で増やしたという。

ネズミは、生後約三か月で出産可能になり、一度に一〇匹程度産む。最初に一〇匹用意すると、半年後には約三〇〇匹になっている。いやはや、「ネズミ算式にふえる」などとよく言うが、本当に言葉どおりなのである。余談になるが、江戸時代の和算家・吉田光由みつよしの『塵却記じんごうき』には、正月に一つがいが一二匹を産み、親も子も毎月一二匹ずつ産むと、一二月には、なんと二七八億匹以上になると記されている。

一方『ファンクス』には、何万匹という桁違いの数のネズミが出てくる。当然のことだが、これはCGによって作られた映像である。両作品の間で三〇年が経っており、映像技術の進化を感じさせる。

CGによる違いは、ネズミの数だけでなく、人を襲うシーンにも表れている。『ファンクス』ではCGで作られた膨大な数のネズミが一斉に人を襲うが、『ワイラード』では、ネズミが人を襲うシーンで、ピーナッツバターを体に塗ったという裏話もある。そんな努力をしても、一〇匹程度のネズミが人にへばりついているだけでは怖くもなんともないが。

そのうち、下水管そのものがCGで描かれるようになるかもしれない。だが、それで下水管がより正確に伝えられるとは、なかなか思えない。



下水道の歴史と伝染病

『ザ・ペスト』

この作品、ネズミは登場するが、下水管は出てこない。タイトルに偽りありとなつてしまうが、下水道普及のきっかけともなった伝染病について考えてみようと思い、この『ザ・ペスト』を取り上げることにした。

一八世紀ごろのパリやロンドンには、汚物やゴミを窓から道路に投げ捨てていたといわれる。『十八世紀 パリの明暗』（本城靖久著、新潮社）によれば、市民は街路や公園でも大小便をし、馬車による馬糞もおびただしい量であったという。都市全体が、清掃もされない巨大便所のような状態だったわけである。

ハイヒールが登場したのは、こうした環境下で路上の汚物を踏まないようにするためだったという話がある。そのため、^{かかと}踵だけでなく、つま先まで全部が高かった（トイレで笑える雑

学の本』プランニングOM編、講談社）。

2001年ドイツ/116分

監督：ニキ・ステイン

出演：ティム・ベルグマン アンチエ・シュミット

時代は遡るが、一四世紀中ごろの欧州では、人口の四分の一が死亡したと言われるペスト大流行が発生し、このときパリでは下水道が一部作られている。

その後一九世紀に二度のコレラ大流行があり、ロンドンとパリで下水道建設が進んだ。コレラは経口伝染であり、衛生状態そのものが原因と考えられるが、ペストはネズミを宿主とするノミが媒介するものであり、ノミに刺されなければ感染しない。ペストの流行は、ノミ刺咬しこうによる腺ペストの多発と腺ペストの症状悪化による肺ペストの発生、さらに肺ペストの飛沫感染ひまつという経過をたどる。そう考えると、下水道建設によって衛生状態は向上するが、それでネズミが減るわけではない。だとすれば、ペストに対する下水道の効果は、あまり期待できなかつたのではないか。

伝染病についておさらいしたところで、映画に入っていこう。

STORY

ドイツ・ケルンで、ゴミ収集に対するストライキが起こる。あふれたゴミが町中に大量のネズミを呼び寄せ、ペストが発生する。しかし、市長はパニックを恐れてペスト発生を公表せず、隔離措置も遅れてしまう。その間にも患者は次々と発生し、ついには麻薬常習のペスト患者が路上で吐血して死亡。飛沫感染が始まってしまった。

ケルン中心部は封鎖され、そこに残された人々とペストとの闘いが始まる。このペストは新型だったため、抗生物質を新たに探さねばならない。封鎖地域の中で、死の影に怯えつつ、人々がとる行動とは。

ネズミについて調べていくと、この映画に対してとある疑問が生じてくる。ペストがノミの媒介によることはすでに述べたが、このノミはクマネズミに寄生する。一四世紀の大流行も、十字軍帰還の荷物に紛れ込んで、クマネズミがヨーロッパに侵入したためである

〔疫病は警告する〕濱田篤郎著、洋泉社。

本作品では、滞水した地下トンネルで最初の患者が発生するのだが、前記をふまえると、それは厳密な設定とは言えないのではないか。泳ぎが得意でなく、家屋を住処とするクマネズミが、水の多い地下トンネルに多く潜むとは考えにくいからだ。

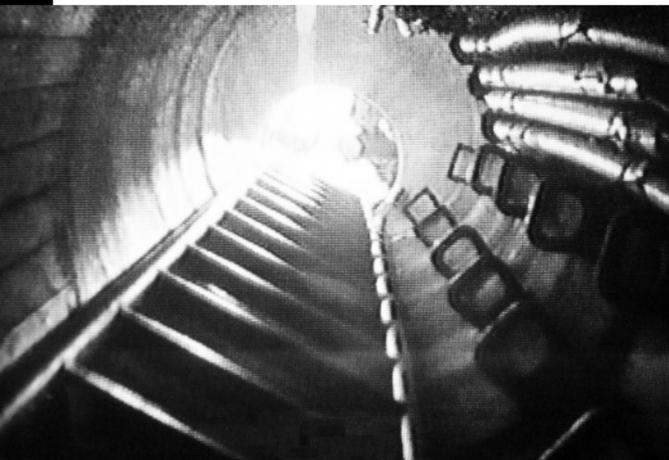
ところで、ネズミの種類とペストの流行の関係については、面白い説がある。一八世紀後半、ドブネズミの大群が中央アジアからヨーロッパに侵入した。ドブネズミはクマネズミよりもひとまわり体が大きく、性格も獍猛である。このため、次第にクマネズミはヨーロッパから駆逐されていった。勝ち残ったドブネズミに寄生するノミは、人の血をあまり



好まないのだそうだ。こうして、さしものペストも媒介者がいなくなり、収束を迎えたというわけである。

映画に話を戻そう。『ザ・ペスト』でクマネズミが地下トンネルに現れるのは、「ネズミはみんなどぶや下水管を走りまわるものだ」という固定観念が招いた誤りなのではないか。特定の動物にスポットが当たる作品の場合には、もう少し、その動物の特性にもこだわるべきなのだろう。私事になるが、私は名古屋市内にある東山動植物園に勤務していたことがある。園内のドブネズミの観覧コーナーへ行ったら、下水管を模した住処が作ってあった。さすがに、動物園はちゃんとしていると思っただけである。

この作品では、冒頭でマンホールの立ち上がり部分が映される（写真）。これは下水管か？ と期待して観ていくと、地下鉄につながっている地下通路のようなところにホームレスが暮らしている。字幕では、「放置されている地下トンネル」と表現されている。彼らのような地下生活者を「モグラビと」と呼ぶことがあるのだそうだが、それについては別の項で詳しくお伝えしたい。



体長7・5cmのネズミから見る下水管

『スチュアート・リトル』

ネズミという生き物は、古来、人間と深い関わりをもっている。十二支の最初がなぜネズミになったかなど、昔話にネズミはよく登場する。また、幼児向けの絵本にも、いわゆる「14ひきシリーズ」や、なかえよしを・上野紀子の「ねずみくんシリーズ」など、長く愛されてきた作品でネズミを主人公としたものは多い。

児童文学ですぐに思い浮かぶのが、『冒険者たち ガンバと15ひきの仲間』(斎藤惇夫作・数内正幸画、岩波書店)である。昔『ガンバの冒険』というタイトルでテレビアニメ化されており(アニメも名作の誉れ高い)、二〇一五年にも『GAMBA ガンバと仲間たち』として3DCGアニメ映画にリメイクされているので、ご存じの方も多いかもれない。救いを求めてきた忠^{ちゅうた}太の仲間を助けるために、ドブネズミのガンバと一五匹の仲間がイタチのノロイと闘う話である。私は、「忠太」が登場することもあるが、この物語が特にお気に入りなのである。

2000年アメリカ / 84分

監督:ロブ・ミンコフ

出演:(声)マイケル・J・フォックス ジーナ・デイビス

ネズミは、大黒様の使いとして、富をもたらずとも言われている。これは、多産であり、よく動くことから働き者という連想がされるためだろう。このように、(少なくとも日本に
関して言えば) イメージとしてのネズミは好意的に描かれている場合が多い。その一方で、
現実のネズミはひどく嫌われている。食物や作物を食い荒らし、家の柱や電線などを齧っ
て火事の原因を作る。様々な病原菌を保有していることも多い。

そんなネズミが、人間の家族になってしまおうという不思議なお話が、『スチュアート・リ
トル』である。

STORY

リトル夫妻は、弟をほしがるひとり息子・ジョージのため、養護施設へと出かける。
そこで引き取ってきたのは、なんと言葉を話すネズミだった！ ジョージはキャッチポ
ールもできない体長七・五センチの弟に不満。そんなある日、ジョージがリモコンの模
型ヨットレースに参加する。ところが、本番前にリモコンが壊れてしまう。そこで、ス
チュアートは模型のヨットに乗り込み、自らセーリングすることを決意。見事レースを
優勝に導いたのだった。

ジョージとも打ち解け、うまくいくかに見えるが、近所のドラ猫の毘にはまり、スチ

この映画の設定は、非常に不思議というか、どこか違和感すらある。動物が動物であるまま家族の一員として扱われるというのは、現実にもよくある話だ。しかし、言葉話す動物が、養子縁組までされて法律的にも本当の家族になってしまうのだからすごい。

だが、スチュアートは言ってみれば「小型の人間」であり、ネズミである必要性はあまり感じられない。まあ、あまりネズミの家族はヘンだとこだわると、作品の本質、すなわち「他者を受け入れ、家族をつくり上げていく努力が大切」というテーマを見失ってしまうのかもしれない。

「スチュアートは小型の人間」だと述べたが、下水管内での彼の動きも人間のように描かれている。ニューヨークはセントラルパークでドラ猫たちに襲われたスチュアートは、排水口へ落ちてしまう。そして、大量の水が流れる管の中を、カバンにつかまって乗って流れていく。写真ではわかりにくいかもしれないが、接続室らしきところがあり、柱の影が見てとれる。壁はブロックを積んだような感じだ。下水管自体は、材質や管の状態はあまりはつきりとは描かれていない。その管からマンホールのようなところへ水が落ち込んで



いくのである。かなり大きな管かと思ってしまうが、スチュアートの体長（七・五センチ）から考えれば、取付管が直径三〇センチ程度の管である。私たちが七・五センチの身長になれば、雨水桝がこんなふうに見えるのか。

原作では下水管の中のスチュアートをどのように描いているのか知りたくて、E・B・ホワイト『スチュアートの大ぼうけん』（ガース・ウィリアムズ絵・さくまゆみこ訳、あすなろ書房）を読んでみた。アメリカ児童文学の古典ともいうべき作品である。ところが、残念ながら下水道の出でくる場面はなかった。映画は、原作とストーリーもかなり異なり、脚色されている箇所も多い。また、原作の冒頭では、お母さんがバスタブの排水口に落としした指輪をスチュアートが取りに行く場面がある。このエピソードは、映画では続編の『スチュアート・リトル2』に出てくる。しかし、排水管の中まで描かれてはいないのが残念だ。

「スチュアート・リトル」シリーズは三作目まで製作されているが、第三作は『森の仲間と大冒険』というタイトルで、下水管の登場する可能性が低いいため、私は未見である。



美しき下水管をネズミがひた走る

『パリ・デイストラクション』

二〇〇九年は、新型インフルエンザが流行して大きなニュースとなった。インフルエンザは、鳥や豚から人間にうつる病気である。こうした病気を「人畜共通感染症」という。聞きなれない言葉だが、ペストや狂犬病などのよく知られた病気もそれに相当する。

人畜共通感染症は、近年、その危険性を高めていると言える。なぜなら、外国からきちんと病原性の検査をしていない動物が、どんどん入ってきているからだ。

しかも昔のような、使役を目的とした、たとえばネズミを捕らせるためにネコを飼うような形ではなく、「コンパニオン・アニマル」、すなわち生活の伴侶として動物を飼うことが多くなっている。そうなると、ペットとのふれあいは、ほおずりをするなど必然的に濃厚なものとなり、動物の持つ病気に感染する可能性が高くなってしまふ。

日本ではあまり騒がれなかったが、一九九八年には、アメリカから日本へ輸出直前のプ

2006年フランス／94分

監督：シャーロット・ブランドストーム

出演：クレア・ポロトラ ティエリー・ヌビック

レリードッグにペストが発症し、五〇〇頭あまりが処分された事例がある。これが契機となり、二〇〇三年以降、日本ではレリードッグの輸入禁止が続いている（『これだけは知っておきたい人獣共通感染症』神山恒夫著、地人書館）。

話がそれってしまった。ペットといえば、ヨーロッパではマウス（ハツカネズミ）だけでなく、ラット（ドブネズミ）もペットとして飼われているらしい（野生動物は病原菌の宝庫なので、十分に注意されたい）。今回は、そんなペットとしてのネズミが鍵となる映画の話である。

STORY

清掃組合のストによりゴミの街と化したパリでは、ネズミが異常に増え、原因不明の病人も増え始めていた。診察にあたった医者ローレンスは、ネズミが原因だと確信をもつ。一方、ネズミ駆除業者アレックスは、プール近くの下水道に何百匹ものネズミを発見する。衛生委員にウイルス警報の発令を依頼するが、パニックが起きると拒否されてしまう。同じころ、ローレンスの娘がネズミに咬まれ発病。だが、娘のペットのハツカネズミは発病せず、抗体をもつことを知るのだった。

街では死者が出るに至り、マスコミも騒ぎ始める。軍はフェロモンでネズミをプールにおびき寄せ、爆破する作戦に出る。下水道を走り、プールに何千匹ものネズミが集ま

ってくる。刻々と爆破の時刻が迫るなか、新たな問題が……。

この作品では、アレックスが下水管を調査するシーンと、ネズミたちがプールへと走ってくるシーンで下水管が映される。両方とも石積み的美丽な管である。さすが、パリと言いたくなる。ストーリーは、先に紹介した『フアングス』と似ているのだが、下水管の描写はかなり違う。監督も下水管の美しさを描きたかったのか、いくつもの角度から映している。また、DVDのパッケージの裏面にも下水管の絵がはめ込まれていて、印象的なシーンだと言わんばかりだ。

最初にアレックスが調査をする場面では、同じ石積みでも、管の脇に通路が作られていて、水路と通路の間にアーチ型の仕切壁のようなものが設けられている。他にも鉄パイプらしきものが映るので幾分雑然とした感じがするが、それらを取り除いた本来の下水管全体は、遺跡のように美しいのではないかと思う。

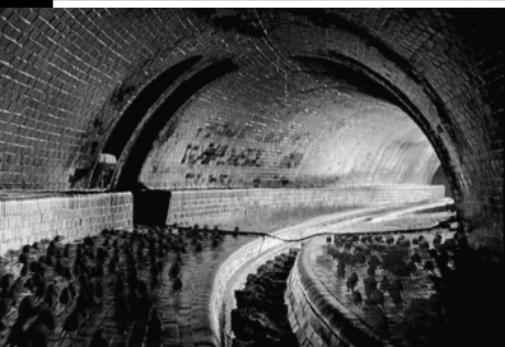
一方、ネズミたちがプールへと走ってくる管もいくつかのタイプが描かれており、写真で紹介したのは、かまぼこ型で底の中央に水路を設けてあるタイプと卵形のタイプである。卵形管は、カーブしているようで不思議な角度で映されている。



映画には、もう一箇所、ハツカネズミが下水管を行くシーンがあるのだが、このシーンだけはなぜか普通のコンクリート管が映される。日本でもよく見かける管路風景だ。

映画で映される下水管はあくまで舞台としてあり、下水管を紹介するために映されるわけではないので、観ている最中に「あー、その右側の奥はどうなっているの」と注文を言いたくなったりするのだが、往々にして、そんな気持ちは無視されて次の場面に飛んでしまふ。仕方のないことなのだが、こうして紹介しようとする、全体を見られない歯がゆさがつのる。

『パリ・デイズトラクション』ではフェロモンを使ってネズミをおびき寄せたが、有名な「ハーメルンの笛吹き」では笛によってネズミを川の中へ連れていく。いかにも嘘っぽく思われるが、実はネズミは超音波で交信しており、笛からも超音波が出ていて、実験をすると笛のほうへ寄っていくネズミもいるらしい(『十支の動物誌』阿部楨著、技報堂出版)。そのうち、超音波でおびき寄せるネズミ・パニック映画ができるかもしれない。



どこにでもつながる下水管

『ラッツ』

ここまで、ネズミが主役の作品をいくつか紹介した。下水道が登場する映画も、数が多くなると、なんらかの分類をしておきたくなるものだ。目次をご覧いただければわかるように、この本はテーマごとに分けてある。だが、それらのテーマは、必ずしも区分方法が整理されているわけではないというのが正直なところである。

本書には、おおまかにいって二つの分類が混在している。一つは、下水管の使われ方に着目した分類、すなわち「逃走路」「隠れ家」などという分類である。

もう一つは、災害パニックとかホラーのように、映画の内容・ジャンルで分ける方法である。たとえば「ネズミ編」は、ネズミが話の基になっている点だけで集めているので、下水管の使われ方を考えているわけではない。

一つの分類方法のみをとると、特定の項目の作品数だけがやたらと多くなってしまう。

2002年アメリカ／94分

監督：ジョン・ラフィア

出演：メツチェン・エイミック ヴィンセント・スパーノ

また、あまりこだわると難しい作業になって、逆に混乱する。だから、適当に使い分けているのが実情である。

STORY

ネズミが大量発生したニューヨーク。スーザンが勤めるデパートでも客が咬まれ、ワイル病にかかってしまう。ワイル病は、肝臓・腎臓障害、全身出血などの症状を起こす致死率の高い伝染病だ。ネズミ駆除業者のジャックが依頼を受けて調査を進めると、閉鎖された実験施設から、与えられていた植物により凶暴化したネズミが逃げ出したことが判明する。すでに繁殖は進み、下水管には、なんと五十万匹ものネズミが潜む巣があるらしい。ネズミたちは、トレーニング施設のプールなど、いたるところで人間を襲い始める。

ジャックは、実験で与えられていた植物の香水を使ってネズミをプールへおびき寄せ、爆破により殲滅する作戦を立てる。目論見どおり、プールの排水口からネズミが噴水のように噴き出し、ネズミのプールと化す。あとは爆破さえできれば作戦は成功と思われたが、誤ってスーザンがプールに落ちてしまうのだった。

どこかで聞いたような話である。そう、すでに紹介した『フランクス』『パリ・ディストラクション』とよく似ているのだ。舞台こそ異なっているが、特に『パリ・ディストラクション』とは、プールにおびき寄せ、爆破して退治するという設定がまったく同じである。爆破直前に、女の子がとり残されるのも似ている。

しかし、登場する下水管は大きく違っていて、『ラッツ』では大きな管は出てこない。小口径もしくは直径一メートル程度の普通のコンクリート管である。そこをリモコンの走行式カメラで調査する。そしてネズミの巣を発見するのだが、これが下水管ではないようで、下水管が壊れて大きな空間ができています。

アメリカの作品は、地下のよくわからない空間を映し出すことがままある。廃止された地下鉄の駅とか、使われていない地下室や地下道、共同溝に下水管。大都市には、得体的に知れない場所が必ず存在するかのようである。

それはあなたが嘘ではない。『モグラびと ニューヨーク地下生活者たち』（ジェニファー・トス著・渡辺葉訳、集英社）によると、ニューヨークには、地下七階分に達する大小の空間とそれらをつなぐ通路があり、そこに五〇〇〇人あまりのホームレスが暮らしているという。

映画をよくご覧になる方は、冬の都会の道路上でマンホールから蒸気が上がっているシ

ーンを観たことがあるはずだ。あれは暖房用の蒸気管から漏れた蒸気であり、火力発電の排熱を利用した地域暖房である。そうした管がニューヨークでは百キロ以上にわたって埋設されており、戦前から使われている。このことのみをとっても、地下が迷宮の世界であることを実感できるのではないか。

ただ、地下世界がいくら複雑に入り組んでいるとはいえ、どう考えても不思議な場面というものも出てくる。本作品でも、ジャックの助手が下水管に香水を撒きながらプールへと移動し、最後にスロープ状の坂を登って換気用の大きな出入口に出るシーンがある。メッシュ状のカバーを押し倒して、助手がネズミと共に逃げ出してくる。あれは換気用ではなく排水の点検用に作られた大型通路だったのかと一瞬思ったが、スーザンが「通気孔よ」と叫んでいるではないか。いくらなんでも下水管と通気口はつながっていないだろう。

それにしても、『ラッツ』に登場するネズミの量は半端ではない。端的に言って気持ち悪い映像である。ホラーではないのだが、その手の映像が嫌いな方はご覧にならないように。



パリはU字溝も石造り

『アンミーのおうごうストライン』

本作品はアニメーションである。アニメにも下水管は登場してきたのだ。しかし、下水道が映っていても、アニメを紹介するのはいささか躊躇ちゅうちよしてしまふ。もちろん、「アニメは子供向け」だからというわけではない。

ところで、その昔、東映動画が全盛の時代には、アニメは「漫画映画」という呼び名で親しまれていた。日本で最初の長編アニメ映画である『白蛇伝』はくじやでん（一九五八）の新聞広告にも、「漫画映画」の文字が躍る。その後「長編漫画」とも呼ばれ、団塊の世代には懐かしい『西遊記』（一九六〇）、『わんわん忠臣蔵』（一九六三）、『太陽の王子 ホルスの大冒険』（一九六八）などの名作がつくられた。子供向けではあったが、今のジブリ作品同様、大人も楽しめる作品だった。

話がずれてしまったが、アニメの紹介を躊躇する理由は、正確性を欠くのではないかと

2007年アメリカ／120分

監督：ブラッド・バード

出演：（声）パットン・オズワルト （声）ルー・ロマーノ

危惧したからである。アニメは絵であり、「絵空事」という表現があるように、アニメだとなんでも描けてしまう。だが、よくよく考えると、実写作品でもセットの下水管もあれば、別の場所で撮影したらしき映像も多い。ましてやCG全盛の時代を迎え、「なんでも描けてしまう」点で実写とアニメの差はなくなったのかもしれない。大切なことは、どこまで現物の資料に基づき下水道を描いているかであろう。

ただ申し訳ないことに、私は外国の下水管を資料などでしか見たことがなく、本物かどうかの鑑識眼を持ち合わせていない。私も、できる限り調べてお伝えしたいと思う。

STORY

味覚や嗅覚が抜群に良いネズミのレミーの愛読書は、グストー著の『誰でも名シェフ』という料理本だった。あるとき、暮らしている巣が人間に見つかり、この本を引きずって命からがら排水路へ逃げ出す。排水路のトンネルを押し流されて、本とともにたどり着いたのはパリ。そして、すぐ近くには、今は亡きグストーが始めた「グストーのレストラン」があった。

レミーは、雑用係のリングインを密かに助け、グストー亡き後評価が下がっていたレストランは評判を取り戻していく。

物語は、レストラン乗っ取りを謀る料理長スキナーの企みと、レミーと有名料理評論

家の料理対決が交錯し、ネズミたちが大活躍するクライマックスへと続く。

この映画、笑いあり、リングインの恋あり、レミーとスキナーの追っかけチェイスありとディズニースらしい仕上がり。製作は、『トイ・ストーリー』などでおなじみピクサーである。

しかし、郊外にある一軒家から川のような排水路に流され、パリの下水管に流れ着くシンには首をかしげる。一般的に考えて、下水管は都心部から郊外に流れるものだろう。

この排水路は、逃げ出した家の前から、すぐにレンガのトンネルに流れ込み、接続室のようなどころに出て、一気に激流となって管を流れていく。で、たどり着いたのが写真上の下水道である。セリフに下水道という表現が出てくるわけではないが、どう見ても下水道。遠方には、ブリッジの水管橋らしきものが見える。薄暗く、材質などは判然としないが、石かレンガのようだ。

また、レミーが車や人間に追い回され、雨水排水口から逃げ込む場面では、石造りのU字溝も登場する(写真下)。レミーが人間に嫌われていると悲しむシーンでは、アップでひと

つひとつの石までが描かれる。写真では大きな管きよのように見えるが、ネズミの視点であることを考えればU字溝だろう。パリは歴史的に下水道を築き上げてきているから、U字溝まで石造りなのか。これらが、正確な資料に基づく描写かどうかはわからない。だが、料理のほうは、フランスまで取材に出かけたということで、細部まで描かれている。下水道も正確な表現だと期待したい。

本作品の原題は、『Ratatouille』という。ラタトゥイユはフランスの郷土料理で、レミーが有名評論家に出す勝負料理でもある。原題のつづりの最初には、「Rat（ラット）」という単語が含まれている。レミーがラットであることとラタトゥイユをかけているのだ。

ところで、氣勢を削ぐように申し訳ないのだが、私が潔癖すぎるのか、ネズミが作った料理を食べるといふ設定になんとか嫌悪感を抱いてしまう。ネズミの大勢の仲間が、レミーの指示のもと料理を作る場面など、ストーリーとしては面白く観たものの、食事をしたいとはどうしても思えなかったのだ。



下水道への認識不足が残念

『川の光』

本章最後まで、引き続きネズミが登場するアニメ作品を紹介したい。

先に長編アニメ映画の創成期に少し触れたが、昭和四〇年代（一九六五～七四）にはテレビ漫画は低俗とされ、「テレビばっかり見てちゃダメ」が、世のお母さん方の決まり文句であった。ご存じ『鉄腕アトム』は一九六三（昭和三八）年に始まり、同じ年に『鉄人28号』『狼少年ケン』『エイトマン』が、翌年には、『0戦^{ゼロ}はやと』『少年忍者風のフジ丸』『ビッグX』が、一九六五（昭和四〇）年になると、『スーパージェッター』や『オバケのQ太郎』など一〇作品以上が民放各局で放送開始されている。

ではNHKかというと、テレビ漫画低俗論の影響を受けてか、昭和四〇年代までは放送されることはなかった。NHKが連続番組としてのアニメ放送を開始したのは、一九七八（昭和五三）年の『未来少年コナン』からである。この「コナン」は宮崎駿の初監督作品でもあ

2009年日本／105分

監督：平川哲生

出演：（声）折笠富美子 （声）金田朋子

り、『天空の城ラピュタ』を彷彿とさせる登場人物やシーンが描かれている。

その後、毎年一本程度はアニメを放送していたが、一九九三年に『忍たま乱太郎』、九八年に『おじゃる丸』、二〇〇四年には『メジャー』など、長期にわたるアニメシリーズが開始。九〇年代後半あたりからは、年間でも多数の作品がおもに教育テレビ（現在のEテレ）で放映されるようになった。時代は変わったものだ。

今回取り上げる『川の光』は、NHK総合の環境特集番組『SAVE THE FUTURE』の1環として、二〇〇九年六月に放映されたものである。

STORY

クマネズミのタータは、ある川の土手の巣穴で、弟のチツチとお父さんの三匹で暮らしていた。ところが、その川に蓋をして上に道路を作るといふ覆蓋工事が始まる。タータたち一家は、上流に新たな住処を見つければ旅に出る。

しかし、その旅は楽なものではなかった。まず立ちはだかったのは、よそ者が通るところを許さない、「帝国」と称するドブネズミの支配する地域であった。タータたちは、帝国を迂回する途中でグレンというドブネズミに助けられ、川の上流を目指して下水道を走る。

ところが川は、鉄道の駅の下をくぐる暗きよになっていた。お父さんは、バスに乗って駅を越えることを思いつく。三匹は上流の安住の地にたどり着けるのか。

この作品に登場する下水管は、なんとレンガ造りの卵形管である。ちよつと驚いたが、日本にないわけではない。タータたちは、そこを走って川へ向かうが、大水が迫ってくる。そして、川に排出されるのだ。大水は雨水であり、下水管は合流式ということだろうと私は解釈した。しかし、雨が降り始めたシーンがあるわけではない。なにか釈然としない。

そこで、原作にあたってみた。『川の光』（中央公論新社）は松浦寿輝氏の小説で、『読売新聞』に二〇〇六年から〇七年にかけて連載されたものだ。原作では登場するキャラクターがより多く、エピソードも多彩だ。アニメはその短縮版といえる。下水管のシーンも若干の違いはあるが、おおむね同じだ。そして、次のような表現がある。

「こんなきたない水がああ川に流れこんでいるのか（中略）川はきたないものも何もかも呑みこんで、それをぜんぶきれいにして、しまいいにはあの澄んだ流れにしてしまう」

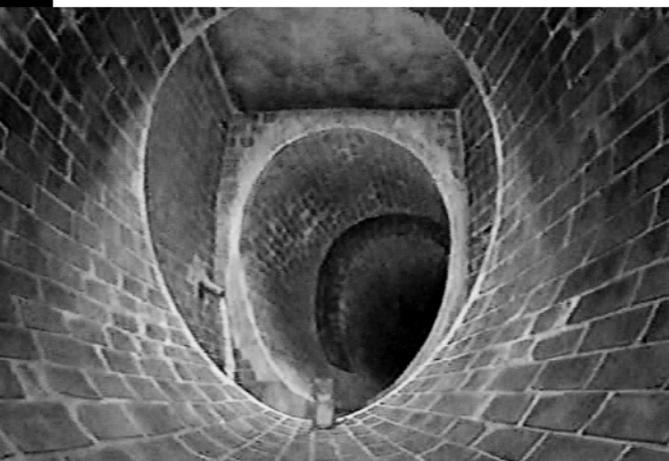
つまり、下水道は整備されておらず、汚水は川へ垂れ流されていると著者は考えており、挿絵もそのように描かれていた。さらに、汚水の排水管は側溝につながれている。

しかし、これは遠い昔の地方都市の話ではなく、東京都内の、そして高校生が携帯電話を話題にする時代、つまり現代の話なのだ。明らかな認識の誤りである。これ以外にも、下流に向かう際に管が二本に分かれる描写もあり、通常、最下流の下水処理場に向けて管が合流を重ねていく下水管の流れもまったく理解されていない。

新聞小説は多くの人が読み、NHKの番組はさらに多くの人が観るだろう。それだけに、多くの人に誤った認識を与えかねないという点で、実に残念な内容と言わねばならない。

この作品は、環境意識の向上も意図して作られているのである。地球環境映像祭で賞もとっている。川という自然につつまれて暮らしたいというタータたちの確かな意志を示す言葉として、「川の光を求めて」というセリフが作品中に登場する。豊かな自然の懐に抱かれた動物たちの姿は、環境のすばらしさを象徴するイメージだ。

だからこそ、公共用水域の水質を守るために働く下水道に対して、正しい認識をもって描いてほしかった。下水道関係者も、さらなる広報に努めなければならない。



SCENE

2

災害編

災害と下水管の関係

『ボルケーノ』

下水管と聞いて連想する災害は、豪雨や洪水といった水害が大半だろう。しかし、本章「災害編」で紹介する映画は、水害とはまったく関係のない作品ばかり。水害を描くとなれば、焦点が当てられるのは水であふれたり流されたりした地上の様子である。大水の流れる地下では活動もできず、結果として雨水管は映りにくいわけだ。

パニック映画のなかでは、自然災害や火事・停電などの人災にとどまらず、ありとあらゆる災害が発生する。もちろん、観客はそれらの災害をフィクションだとわかった上で観るわけだが、下水管のような細部についてはどうだろうか。本章で紹介する作品においては、災害が描かれていく過程で、下水管に本来とは別の役割が与えられることになる。その役割については追って説明していくが、いずれにせよはつきりしているのは、水を流すのではないということだ。

1997年アメリカ／106分

監督：ミック・ジャクソン

出演：トミー・リー・ジョーンズ アン・ヘッシュ

それでは、『ボルケーノ』から見えていくことにしよう。

STORY

ロサンゼルスで地震が発生。ある排水管では蒸気爆発が発生し、死者が出ていた。危機管理局長のマイクは自ら排水管の調査に入るが、コンクリートの割れ目から高熱のガスが噴き出し、命からがら脱出する。

翌朝、女性地質学者エミーが調査のため排水管に入っている最中、再び大地震が発生。エミーは、管にできた裂け目から溶岩を目撃する。一方、管理局へ向かうマイクの目の前では、突如マンホールのふたが次々と吹っ飛ばす事態に。降り注ぐ火山弾によって市内が大混乱に陥るなか、溶岩が地上に噴き出し、道路を川のように流れ始めた。ロス直下に火山があったのだ。

マイクは、溶岩を堰き止め、ヘリから放水することによって冷やし、溶岩の堤防を作ろうと画策する。消防隊や土木業者の必死の作業で作戦は成功、危機は去ったかのよう
に思われたが……。

今回は、下水管そのものではないが、「非常用排水管」なる名称で登場する管路を見てみ

たい。これがどのような目的の管なのかは劇中の説明がないのでわからないが、管はコンクリート製で、中には木の根がいつぱいに入り込んでおり、水も流れていない(写真上)。非常用ということで、あまり使用されていないように見える。私自身は、このように根の垂れ下がった管は、家庭の排水管でなら見たことがあるが、大径管では経験がない。

この管を調査した際、エミーは管がずれてできた段差と隙間を見つける(写真下)。段差ができるということは、ヒューム管やカラーを使った管ではなく、いんろう継手のような管なのだろうか。まあ、そんな詳細な設定が必要なところだとは思えないが。

管自体は、特筆するほどのものではない。面白いのは、地上からの入り口のマンホールは別の管路につながっていて、そこからハッチを開けて排水管の中に入る構造になっていることだ。

潜水艦を想起すればわかるように、ハッチは通常、圧力がかかる箇所に、水漏れを防ぐために付けられる。だが、この管には木の根が入り込んでいるのだから、圧力がかかるというわけではないだろう。一体何のための管なのか、謎が解けそうにはない。

そもそも、ロスのご真ん中で火山が爆発するなんてことはあり得るのだろうか？ 劇中では、麦畑で噴火が起こり、四〇〇メートルほどの高さになったメキシコのパルクティン

火山の例が紹介される。日本の火山では、昭和新山が似た出自をもっている。一九四四年一月に北海道有珠山うすざん麓の麦畑が隆起し始め、翌年九月には標高四〇〇メートル程度の溶岩ドームになった。ロスの位置する北アメリカ大陸西海岸は火山帯であり、設定上は荒唐こうとう無稽むけいというわけでもないのかもしれない。

『ボルケーノ』はディザスター・ムービーの大作だったので、ご覧になった方も多いのではないだろうか。次々と困難な局面が発生し、主人公のマイクはそれを乗り越えて、最悪の事態を回避していく。最後には、開きよの排水路へ溶岩を誘導して、海へ流すという誠に映画ならではのクライマックスへと突入していく。

私はすでに何度か観ており、ストーリーもわかっているのだが、今回再度観始めて、やっぱり最後まで観てしまった。パニック映画が大好きなのである。



道路陥没と下水管の関係

『ホスタイル・グラウンド』

大地は、その言葉からして、安定していて支持力があるように思える。空や海はつかみどころがなくて、頼るよすががない。だからこそ、空路に比べて鉄道に安心感を覚える。しかし、時として、その大地が頼りなく虚空を作ってしまうことがある。陥没だ。

陥没事故と下水管の関連は深く、道路管理者から最初に原因者として疑われるのは下水道事業者である。特に大雨の後や道路冠水があった路線は要注意だ。

ただ、井坂昌博氏の論文「道路陥没対策に着目した下水道管理の維持向上の実践論」(『日本下水道新聞』、二〇一〇年一月一日掲載)によれば、雨が降ってすぐに陥没が起るわけではなく、ある年度の陥没件数と良好な相関を示すのは、その前年度の年間降水量だそう。下水管の破損した箇所などに、少しずつ土が流れ込んで空洞が広がり、翌年陥没が起るのだろう。

『ホスタイル・グラウンド』は、そうした陥没を描いた映画だ(タイトルを直訳すると「敵

2000年アメリカ/93分

監督:マリオ・アソバルディ

出演:ジョン・コーベット ジェシカ・スティーン

意ある地面」とか「敵対する大地」となる。もう少し映画らしくするなら「牙むく大地」といったところだろうか。ただし、下水管が原因となつて陥没が発生するわけではない。

STORY

世界的に有名なマルディグラのカーニバルが始まったニューオリンズ。下水道の点検作業員が、陥没事故で死亡する。市長公室のアリソンは、恋人で地質調査技師のマットに調査を頼む。

マットは、地下水が石灰岩を侵食し、市内全域に空洞ができたという仮説を立てる。探査機で詳しく調べるが、結論が出ないままカーニバルは続行と決定されてしまう。だが、マットが調査を続行すると、そこには巨大な空洞があり、岩がどんどん崩落している。パレードは中止され避難が始まるが、街は混乱の渦へ。

空気に触れると数百倍に膨張する物質で空洞を埋めるべく、マットは地下へ向かう。しかし時遅く、建物もろとも大陥没が発生してしまった。

だが、本当の巨大空洞は、別の場所でさらに大きな口を広げていたのである。

この映画に登場する下水管は、本物ではないのではないか、という気がしている。劇中

では、冒頭の陥没発生時と空洞調査の際に下水道として映されるが、どこかの地下道か建物内の通路のように見える。どちらも同じつくりの管路で、おそらくはレンガ積みであり、かなり広い。写真でもわかるように、一定間隔で柱とアーチ状の梁が見られ、廊下のように直角に曲がる構造となっている。足下に水路部分はなく、まったくのフラットである。また、水がたまっている様子もなく、雨水排水路としか考えられない。

このような状況から考えると、やはり劇中の「下水管」に対しては疑問符を付けざるを得ない。ただし、劇中でそう呼ばれている場所と、実際に撮影された場所が異なるのは、よくある話ではある。道路から下水管へ降りるシーンでは、マンホールのふたをはずしてタラップを降りていくので、一般の観客には違和感がないのだろう。

ところで、今回の作品のような大陥没は現実には起こり得るものなのか。『ボルケーノ』でもそうだったのだが、パニック映画を観るとき、私の関心はどうしてもそこへ向いてしまう。

はじめに紹介した陥没は道路上に発生するもので、それほど規模は大きくない。他方、一九九〇年前後には、栃木県宇都宮市で毎年のように大規模な陥没事故が発生している。当地で産出する大谷石おおやいしの採掘跡の空洞が崩落したためである。一九八九年の陥没は、直径

一〇〇メートル、深さ三〇メートルで、住宅地が近かったこともあり、大きなニュースとなった。

また、二〇〇〇年には鹿児島県でも、第二次世界大戦時の軍事用地下壕が原因で一〇メートルほどの陥没が起こり、死亡者が出ている。

日本では、石材採掘跡や軍事用地下壕だけでなく、石炭や亜炭の採掘跡が数多く残されており、しばしば陥没事故が発生している。

前述した大谷石の場合、地下で支柱となる石を残して、深さ三〇メートル程度まで採石してしまうというから別格かもしれないが、陥没の危険性は日本各地にあり、いつまた大陥没が発生してもおかしくはないだろう。

政府や自治体の対応が急がれるが、個人的にも土地を購入される場合には、それなりの調査が必要ではないだろうか。





君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!